

FADO

2
Junho 1994

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

夜の卓に重ねておけば匂うごと

紙幣は学ぶために得て来ぬ

岸上大作

お金に換えられないもの、お金を出しても買えないもの。若さ、愛、感動する心、そして、ひたむきな情熱etc.…。生来と言うか、持たざるものがありたくも悲しき習性か、私には物に対する執着心が皆無に等しい。

先日、カンツォーネのミルバのドラマチックリサイタルを聴いてきた。スケールの大きい歌い方、詩の解釈の確実さ、その深さ、彼女の存在と声の前に、心は震え、ブラボーの声も出ず茫然と立ち尽くしていた。ともかく、ミルバはすごい！借金してでももう一度聴きたい、見たいと思っている。チケットはお金で買えるが、その感動は金銭を超越している。

私は、一文無しになることを恐れると言うよりむしろ「その時私はどうするだろうか。」その時になって初めて自分の身の振り方に決着がつくような気がしてその時の来るのを待っていたと言ったほうがいいかもしれない。いざ、そうなってみるとお金がないという事はあたりまえで口実にもならない。私が持ち得るもの、それは『情熱』であり「やる気」「負けん気」以外のなにものでもないという結論に達したと言うか、そういう事実気がついた次第。ともかく、骨惜しみ無く動いてみる。ギョラの有無、多少に関係なくあらゆる機会に歌ってみ

ること。自分自身を縛りつけていた鎖-金がないからという諦め-を断ち切り、他人に期待したり、おもねるので無く、自分自身で動ける限り動いてみようと思っている。

まず手始めに、6月29日(水)のライブ「アッコルド」の時に、ポルトガルで習った「PASTEIS DE BACALHAU (鱈のコロッケ)」を作ってみよう。すでにアートクラブでのライブの時には播本ママの発案で実施していることですが、ポルトガルワインも取り寄せようと思う「案ずるより、産むが易し」ともかくやってみよう。そう自分に言い聞かせている今日この頃お金に換えられない“何か”かけがえのないものと出会いたい、そんな時を共有したいと思うのです。

当ファド倶楽部の会員でもあり、毎日新聞学芸部の記者として活躍中の石村綾子さんが5月7日付の同新聞夕刊に書いてくださった「活動10年、ファンクラブが誕生したファド歌手-光と影の旋律に本物の響き-」と題した記事の反響の大きさにびっくり。写真撮りが良いとか悪いとか、エラの張ったのがカバーされて女っぽいかかぼくないとか、そんな話はさておいて、紙面に載ったライブ会場「巴里野郎」と「アートクラブ」は、大盛況。日頃から空きなのを知っている常連は、予約なしと言う事で断られたり、余りの混雑に「これは日を間違えたか…」と掃りかけるお客様もいたりで、失礼しました。ちなみに、4月の「巴里野郎」のお客様は5名でした。

月田秀子

月田秀子ファド倶楽部 例会だより

毎月第3水曜日に例会を開催しています。今までは、参加者の熱心さのあまり(?)、ついつい、倶楽部の運営面など事務的な話が主となりがちでしたが、今後、そういうカタイ話は、この倶楽部の、運営組織各担当グループであることにいたしました。

月に一度の例会は、月田さんの歌を聞いたりしながら月田と会員>で楽しく語り合う場としたいと思います。

7月の例会は、20日(水)心斎橋の「麗鳴館」で午後7時からです。人数に制限がありますので、恐れ入りますが出席の方は必ず倶楽部に電話で申し込んで下さい。多数の(会員、ビジター)参加をお待ちしています。

ficção

盗切連載

秀子のエピソード帳(1) 恐怖の追跡者

内馬天馬

秀子はその男の異様な態度に気づいたのは、ライブ後の打ち上げで、ギターの池側忠などと好物の焼肉を食べているときだった。テーブル越しに秀子を舐めるように凝視しているのだ。

「ねえ、あの人ちょっと変よ。気味が悪いわ」。

一心不乱に焼肉に集中しているバンドの連中が、彼女の訴えに耳を貸さないのも無理はない。日頃のひもじい食生活が、ここぞとばかり彼らを野生に戻しているのだ。

打ち上げを終え、いつものようにチャリンコで帰途につく。千日前通りから松屋町筋へ。涼しい夜風に心地よく今日のライブの余韻に浸る。その時、さっきの男が追ってくるのに気がついた。顔から血の気がひくのがわかる。懸命にペダルを漕ぐ。が、思ったより速度が上がらない。

ダイエットせねば…と思う間もなく男が迫ってくる。怖い。このあたりは夜ともなれば人通りが極端に少なくなるのだ。

こんな事になるのなら、あんなにお肉やビールを摂るんじゃなかった。

池側忠とはカルビの、岩田晶とはハラミの、それぞれ最後の一切れを醜く奪い合った事が今となっては悔しい。打ち上げ前より確実に3キロは太った自分が恨めしい。

吹き出す汗は恐怖のあぶら汗。人より自転車のほうが遠くに決まってる。なのに懸命に走る男の生きづかいが、徐々に、確実に近づいてくるのが秀子の長い黒髪に伝わってくる。

神様、助けて！

やっとマンションが見えてきた。男との距離約10メートル。自転車を放り出し、転がるようにエレベーターに駆け込む。

扉よ閉まれ！

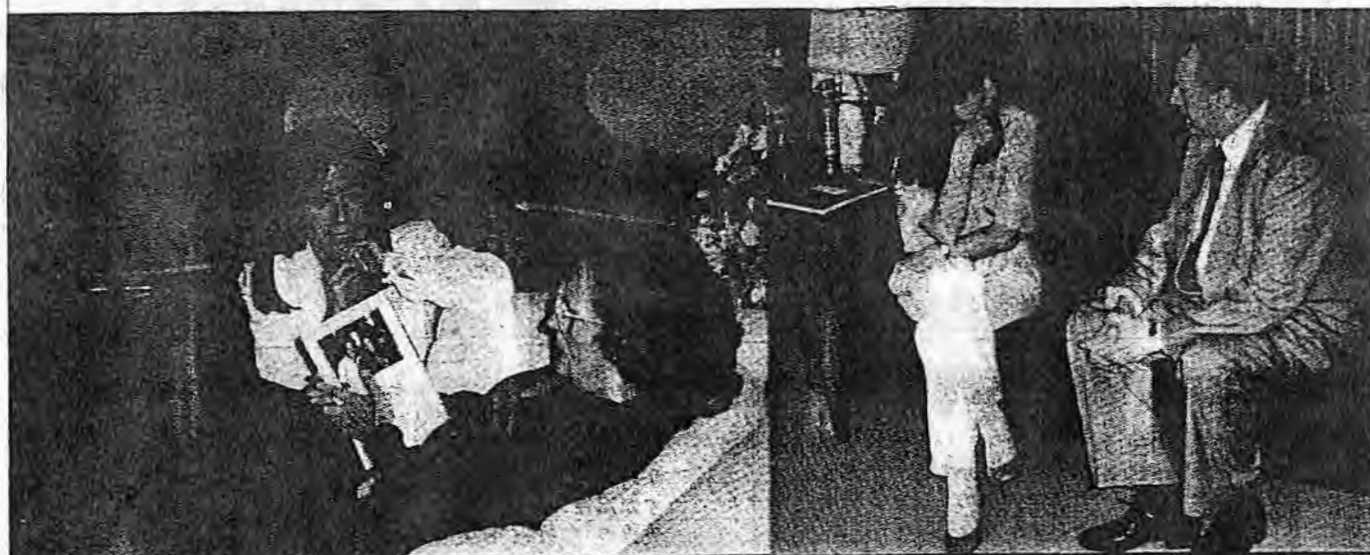
が、男の腕が扉の隙間を割り、続いて身体が強引に入ってきた。

あゝ、絶体絶命だわ！この若き？身空をこんなところで散らすなんて、なんてむごい運命なの。男が激しい動作で懐から何かを出す。

凶器？

思わず両手で顔を覆う秀子。一瞬殺られた、と思った。が、まだ生きている。恐る恐る顔から手を下ろす。男の手には秀子のCDが…

「あ、あの～、サインしてくだじゃい！」



アマリアロドリゲスと月田さん。STペントのアマリアの自宅にて。

「悪いハシケ」「マリア、リシュポア」等の作曲者。d.m.フェレーラ氏と月田さん。

<縁がとりもつ「サウダーデ」の響き>

くすんで灰色に変色した白い壁、バルコニー、障戸のある縦長の窓、ぶらさがる洗濯物、曲がりくねった石畳の狭い通り、階段や坂道、袋小路も多い。犬は吠える。路地の片隅で坐るくたびれた老人、はしゃぎまわる子供たち、窓から威勢のよい隣の声がある。上を見上げて、空は幾らも見えない。思い出したように降ってくる雨、それに濡れてポーッと人魂のように見える夜の街灯——パリのベルヴィルやリスボンのアルファマの裏町風景である。こんな下町から、下町っ子の詩人たちによって、シャンソンやファドが創られ、歌われてきた。

そうした小唄のメロディーに投入されるアコーディオンの音は、あたかもジャズにおけるサクソ、イタリア民謡におけるマンドリン、ファドにおけるポルトガルギターの関係にも似ており、古いシャンソン、とりわけ、トーキー映画時代のシャンソン、パリを歌ったシャンソンには、アコーディオンは欠かせない存在である。

今回、このアコーディオンとファドが結び付いたライブが企画された。すでに、ファドの本場ポルトガルでは、それが実現しており、アコーディオンが和音を担当している。

日本、ポルトガル友好450周年に因んで来日し、コンサートが開催され、日本でもコンパクトディスクが発売された「ミージア」が、それである。また、「マードレデウス」のコンサートにも登場しているが、プロデューサーのペドロ・A・マガリヤンエス氏は「チェロとアコーディオンの選択は、クラシックのリサイタルと民衆音楽の結び付きを考えて決められた」と、アコーディオンと言う楽器の持つ“民衆性”を述べている。

5月20日の「アッコルド」でのライブは、月田秀子さんのファドと、長い経歴と熟達した奏法を持つ、アコーディオンの名手・吉川隆氏との出会いであり、ギターの池側忠氏を加えた編成での新しい試

みであった。ファドの上旋律を担当するポルトガルギターのめきであったが、聞いてみて、「うん、これはいける」、「ファドの持つ下町風情にびったりだ」という即座の感想である。その響きは、ある時は強く、ある時は弱く、ある時はリズム感に溢れていて、月田さんの歌うファドとうまく調和していた。

そして、私にとって感無量であったのは、この2人のアーティストとの人間関係である。月田さんとの付き合いは、「ベコー」で彼女がシャンソンを歌っていた頃からで、コンサート、ライブを通じて10数年を経過している。一方、アコーディオンの吉川氏は、ほんのちょっとした情報で、私と同郷で、彼が小学校の先輩である事がわかった。私は生まれ故郷の村（大阪近郊）を出てから、すでに40年ほどになり、現在の住所まで、各地を流離・転々してきた。年に一度、村に墓参りに帰る程度である。吉川氏とはガキ時代に会ったきりで、実に40数年ぶりの再会であった。

ライブの間に吉川氏とのちょっとした会話の中で、生まれ故郷の近所の人達の名前、小学生時代の同級生の名前、忘れていたものが蘇った。ファドの心である「サウダーデ」、それは、流離、故郷への不在感、彷徨孤独、思い出等を意味するポルトガル語であるが、この日のライブは、私にとってまさに「サウダーデ」そのものであった。

ファドとアコーディオンの出会い、そして、私と2人のアーティストとの縁、縁とは恐ろしいものである。世間には、血縁、地縁、会社などとの社会的組織縁等、縁は数々あるが、このような縁の桎梏から解放されて、人間は「自由」になるのだが、現実にはなかなかむずかしい。が、「縁は異なるもの、あじななもの」でそれによって幸運が転がり込む事もある。当日、「パトリシア・カース」のコンサートがあり、マゾヒスティックなロック調のシャンソンを聞いた後の事で、何やら現在から過去に逆もどりした感じの一夜であった。

(H・T生)

「月田秀子ファド倶楽部」例会へのお誘い

「月田秀子ファド倶楽部」の例会は、月田さんの歌を聞いたり、楽しい話をしながら、彼女を応援し会員相互の、親睦をはかる場としたいと思います。会員皆様！多数のご参加をお待ちしております。

★毎月第三水曜日午後7時から例会です★

7月の例会・ライブ

7月20日(水)午後7時より

大阪・心斎橋「慶鳴館」☎06-241-9219
[そごう]と[大丸]の間を、東に30m行って
カメラのナニワの向かいの路地に入って右側です

「月田秀子ファド倶楽部」入会のご案内

- 申し込みの方法：郵便振替でお願いします。
- 口座番号：大阪 9-18440
- 加入者名：月田秀子ファド倶楽部
- 会費：入会金/2,000円 年会費/3,000円



informação

< 月田 秀子のスケジュール >

- 6月20日(月) 山梨・清里/清泉寮/本館ホール
要予約 ☎0551-48-2111
7:30開場/8:00開演
- 6月24日(金) 京都・四條河原町「巴里野郎」
☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし)
ピアノ:河村真千子 ギター:池側忠
- 6月27日(月) 大阪・心斎橋「アートクラブ」
☎06-253-0827
①8:00~ 3回ステージ (入れ替えなし)
ポルトガルギター:佐野健二
ギター:池側忠
- 6月29日(水) 大阪・上六「アッコルド」
☎06-773-3110
ポルトガルギター:佐野健二
ギター:池側忠
- 7月16日(土) 三重・伊勢志摩「合歓の郷」
VITOコンソレーションとのジョイントライブ
- 7月20日(水) 大阪・心斎橋「麗鳴館」
☎06-241-9219
ファド倶楽部例会:ライブ
■出席申し込みは必ず倶楽部へ☎06-645-4717■
ポルトガルギター:佐野健二
ギター:池側忠
- 7月25日(月) 大阪・心斎橋「アートクラブ」
☎06-253-0827
①8:00~ 3回ステージ (入れ替えなし)
ポルトガルギター:佐野健二
ギター:池側忠
- 7月29日(金) 京都・四條河原町「巴里野郎」
☎075-361-3535
①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし)
ピアノ:河村真千子 ギター:池側忠
- 8月8日(月) 三重・伊勢志摩「合歓の郷」
VITOコンソレーションとのジョイントライブ
- 8月19日(金) ファド倶楽部例会
大阪・上六「アッコルド」
☎06-773-3110
アコーディオン:吉川 肇
ギター:池側忠
- 8月29日(月) 大阪・心斎橋「アートクラブ」
☎06-253-0827
①8:00~ 3回ステージ (入れ替えなし)
ポルトガルギター:佐野健二
ギター:池側忠

【編集後記】『FADO』第二号をお届けします。現在のところまだまだ手探り状態で、今回も仕事との板ばさみの中で時間に追われ、果たして紙面が埋められるか?—悪夢を二度ほど見ました。それだけに、ご投稿いただいたお二人には感謝!そして月田さん、毎回ご苦労様。「原稿も、ストックを持つほどに、なってみたいね」と、俄万智(ちょっとフルイかな?)風に言ったスタッフの一人。皆様の投稿をお待ちしています。(K)

●会報作りスタッフ募集

男女は問いませんが、ワープロが打てれば最高です。

●会報の原稿募集!

ファド関係以外にも、テーマは自由。ご送付は事務局まで。

編集・発行 「月田秀子ファド倶楽部」事務局
〒542 大阪市中央区高津3-14-8-1001
TEL. FAX. 06-645-4717